

「中村後」を歩み出したペシャワール会

アフガニスタンで語り継がれる弱者への思い

昨年末にアフガニスタンで亡くなったNGO、ペシャワール会（本部：福岡市）の指導者、中村哲医師のお別れ会が1月25日、福岡市の西南学院大学チャペルで催された。同会幹部は「事業継続こそが遺志に応えることだ」と、今後も医療支援や用水路建設の協力を続けることを誓った。

アフガン人5人の遺影も祭壇に

お別れ会の会場になったチャペルの祭壇には、中村さんの大きな遺影を囲むようにアフガン人男性5人の遺影が飾られ、涙を誘った。ともに車で銃撃を受け、亡くなった専属の運転手、ザイヌッラー・モーサムさんや警備の人々だ。一度に6人が殺害された事件の大きさと残忍な犯行を物語っていた。

中村さんと親交があったバ希尔・モハバット駐日アフガン大使は日本語で挨拶した。「中村先生は『100の診療所より1本の用水路を』と訴え、干ばつの悪化で水不足、栄養失調、感染症に苦しむ人々の生活を変えるため、生涯を捧げた。現地で先生は『カカムラッド（ムラおじさん）』と呼ばれ、

親しまれていた。先生を救えなかったことを本当に申し訳なく思い、悔しさと悲しみでいっぱいだ」と、こぼれる涙を拭いながら語った。

続いて登壇したのは、国際協力機構（JICA）の北岡伸一理事長だ。以前、学長を務めた国際大学で中村さんを講演に招いたことがあり、尊敬していたという。「アフガンでは国連も赤十字も苦労する中、一人の医師が緑の大地計画で空前絶後の協力をした。市民や農民の信頼を集めたのは地元の材料を最大限に生かし、人々とともに用水路を建設したからだ。現代の英雄であり、同時代に生きたことを誇らしく思う」と述べた。

会場では、ペシャワール会と現地NGOのピース・ジャパン・メディカルサービス（PMS：平和

65万人に及ぶ。柳やナツメヤシなどの植樹は昨年100万本に達した。掘った井戸は1,600以上ある。

惜別の献花には5,000人以上の長い、長い列が続いた。中村さんが通った教会の牧師、医学生時代に中村さんに触発されてPMSに参加した鹿児島県・徳之島町の離島の医師、アフガン在勤時代に中村さんを知って尊敬するようになった米国人外交官、そして会を支えてきた婦人ボランティアたち…。多くの人が最後のお別れをした。

9・11後に会員数1万人突破

ペシャワール会（現在の会員約1万2,000人）は1983年、中村さんが卒業した九州大学などの人脈が中心になって結成された。旧ソ連の軍事侵攻で300万人以上のアフガン難民が避難したパキスタン北部で医療支援を進めた。

その名が一躍、知れ渡ったのは2001年9月11日の米国同時多発テロがきっかけだ。アフガンのタリバーン政権に対し、米軍は空爆による掃討作戦を展開した。その状況下、中村さんは食料不足に直面する人々のため、「アフガンいのちの基金」を設けて食料支援を



中村哲医師の遺影に献花するモハバット大使（右）と北岡理事長＝福岡市の西南学院大学で

医療団・日本）の活動を記録した映像が流された。中村さんが急峻な山道をロバに揺られて訪問診療に行く姿や、用水路で水が行き渡った田畑の様子が紹介された。用水路建設は総延長27kmに達し、オリーブ、サトウキビ、オレンジなどの栽培で裨益する住民は

進めた。気候変動の影響も加わり、深刻な干ばつが続いていた。空爆に断固反対し、弱者に寄り添う姿は大きな共感を集めた。九州中心だった会員網は日本全国に拡大し、2002年には1万人を突破した。

昨年12月4日の事件後、同会には寄付金が続々と寄せられた。12月は銀行振込が約6,900件、今年1月は約2,200件と例年よりほぼ倍増した。追悼集会や写真展も九州、東京、関西など全国で開催が続いている。中村さんの人柄と功績、それを支えた市民の熱い思いがひしひしと伝わってくる。

同会の村上優会長は「残された私たちは事業を継続し、中村先生の希望を引き継ぐことを決意した」と明言した。

ただ、9・11後にアフガンへの関心が最高潮に達した時から18年以上たち、会員の表情にも寄る年波を感じる。お別れ会に先立って開かれた同会の総会では「中村後」を案ずる声も出た。

「会員は中村先生の人徳と志を慕って集ってきた。今後、『中村哲ペシャワール会』と名称を変更してはどうか。遺志を継ぐために加入する人もいる」

これに対し、村上会長は「中村先生は自分一人で用水路を造ったわけでない、自分の名だけが出ることを嫌った。今までの名称に愛着を持っていた」と答え、名称維持が支持された。その後も、指導体制や現地での事業方針について突っ込んだ質疑が続いた。

若い世代の参加も

苦難の中を漕ぎ出した同会にとって頼もしい要素は、若い世代の参加だ。同会事務局のPMS支援室にはこの数年、20歳代の男性3人が常勤職員として加わっている。事務作業をしながら、現地の公用語の一つであるパシュトゥー語や河川水利などの勉強を続けており、将来は現場の最前線で働くことを思い描いている。

一番の若手である山下隼人さん(24)は昨春、久留米大学を卒業後、事務局に入った。授業で同会の福元満治・広報担当理事の話聞き、人道支援に関心を抱いた。「以前から人助けに携わりたいと考えていた。数十年、数百年後を考えて生きる中村先生のような男になりたいと思った」と語る。

現地の厳しい治安情勢では、日本人職員はなかなかアフガンに入国できない。しかし、2月上旬には日本側とアフガン側の現地職員がインドに集合し、今後の事業方針を話し合った。

一方、同会にとって今後の事業を進める上で重要なプロジェクトが動いている。同会とPMSが河川の堰や用水路を建設して蓄積した技術とノウハウをまとめ、ガイドラインを作成する事業だ。日英のほか、現地のパシュトゥー語とダリー語にも翻訳される。JICAの「農業・農村振興基礎情報収集・確認調査」として支援を受け



用水路の建設を喜ぶ住民と中村さん
II ペシャワール会 PMS 提供

ており、来春にかけて完成する予定だ。灌漑、治水、農業振興にわたる幅広い事業の継続と現地人材の育成に役立つことだろう。

中村さんへの想いはアフガンでも大きく広がりつつある。現地からの報道によると、銃撃事件の2日後に生まれ、「ナカムラ」と名付けられた男の子がいる。アフガン東部出身の父は「干ばつに苦しむ人を助けたのは外国の軍隊でも武器でもなく、中村医師だった」と命名理由を話しているという。

また、カブールでNGOを率いるザビーフ・マハディさんは中村さんの人生を現地の言葉で描いた絵本を近く出版する。題名は中村さんの愛称「カカムラッド」だ。マハディさんはアフガン政府職員で、日本政府の「未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト(通称 PEACE)」で東海大学大学院に留学した。絵本は日本企業の資金支援も得て、アフガンの幼稚園や学校に配布される。

中村さんの志と平和への願いは日本でも、アフガンでも着実に語り継がれ、引き継がれ、生き続けていくに違いない。

(本誌編集委員：竹内 幸史)